2018年度　多摩美術大学 芸術人類学研究所＋芸術学科21世紀文化論 共催

第6回「土地と力」シンポジウム

物質と生命

鶴岡真弓 所長（美術文明史家）

平出 隆 所員（詩人・作家）

港 千尋 所員（写真家・著述家）

安藤礼二 所員（文芸評論家）

椹木野衣 所員（美術批評家）

会場

多摩美術大学
八王子キャンパス・レクチャーホールB

日時

2018年11月10日（土）

開演13:15（開場12:45） 終演16:10

2018年度 多摩美術大学 芸術人類学研究所＋芸術学科21世紀文化論 共催

第6回「土地と力」シンポジウム

物質と生命

芸術表現は「もの」と「こころ」の間、物質と生命の相互作用から生み落とされる。すべてが情報に還元されてしまい、「もの」の概念が根本的に変容しようとしている今この時、あらためて人間と物質、生命と環境、表現と作品の関係を根本から問い直す。「もの」の秩序を更新し変革していくことは、「こころ」の秩序を更新し変革していくことにつながる。巨視的な人類史の上に立って、芸術表現の現在を繊細かつ微視的に解剖し、その未来を提示する。芸術と人類学、詩と批評、理論と実践を新たな次元で総合することを目指して活動を続けてきた芸術人類学研究所のメンバー全員が集い、「場所」と「イメージ」に続き「物質と生命」の諸相を論じ尽くす。

写真撮影：港千尋　表面：オランダ　エイセル湖　2018年
裏面：「環間みえる糸口」"perceived by the thread's ends" by kugenuma　紅棟公園芸術祭2018　© kugenuma (kio griffith & chihiro minato)

会場　多摩美術大学八王子キャンパス・レクチャーホールB
日時　2018年11月10日(土)　開演13:15（開場12:45）　終演16:10
入場無料・事前予約なし（一般の方は先着順でご入場いただき、満席の場合は立ち見となります。）

お問合せ：多摩美術大学 芸術人類学研究所
192-0394 東京都八王子市鑓水2-1723
電話：042-679-5697　Email: iaa_info@tamabi.ac.jp
URL: http://www.tamabi.ac.jp/iaa/
アクセス情報：http://www.tamabi.ac.jp/access/

Institute for Art Anthropology, Tama Art University

登壇者プロフィール

鶴岡真弓
美術文明史家。多摩美術大学教授、同芸術人類学研究所所長。早稲田大学大学院修了後、アイルランド、ダブリン大学留学。ケルト芸術文化、およびユーロ＝アジア装飾デザイン交流史を軸に、西はアイルランド、東はシベリア・日本列島に至る「ユーロ＝アジア文明の生命デザイン」を追跡中。主著に『ケルト／装飾的思考』『ケルト美術』『装飾する魂』『京都異国遺産』『ケルトの歴史』（共著）『ケルト再生の思想――ハロウィンからの生命循環』『ケルトの想像力――歴史・神話・芸術――』『装飾デザインを読みとく30のストーリー』など多数。

平出隆
詩人・作家。多摩美術大学図書館長、教授、同芸術人類学研究所所員。一橋大学卒業。その詩は散文との重層領分に及び、『胡桃の戦意のために』『ベルリンの瞬間』『私のティーアガルテン行』など多数。国際的ベストセラー小説『猫の客』は、20ヵ国語に翻訳。DIC川村記念美術館で1月まで開催の「言語と美術――平出隆と美術家たち」展では《via wwalnuts叢書》や《private print postcard》などの実験的刊行物も展示中。

港千尋
写真家、映像人類学者。多摩美術大学教授、同人類学研究所所員。早稲田大学卒業。南米滞在後、パリを拠点に写真家として活躍し、混迷の時代をするどく射抜く独自の批評活動を展開。芸術の発生、記憶と予兆、イメージと政治などをテーマに、ラディカルな知と創造のスタイルを提示。主著に『記憶――創造と想起の力』『洞窟へ――心とイメージのアルケオロジー』『芸術回帰論』『ヴォイドへの旅』『書物の変』など多数。最新刊に『風景論――変貌する地球と日本の記憶』。

安藤礼二
文芸評論家。多摩美術大学教授、同芸術人類学研究所所員。早稲田大学卒業。大学時代は考古学と人類学を専攻。出版社の編集者を経て、文芸評論家として活動。主著に『神々の闘争 折口信夫論』『光の曼荼羅　日本文学論』『場所と産霊 近代日本思想史』『折口信夫』『近代論 危機の時代のアルシーヴ』『霊獣「死者の書」完結篇』『たそがれの国』『祝祭の書物 表現のゼロをめぐって』など多数。

椎木野衣
美術批評家。多摩美術大学教授、同芸術人類学研究所所員。秩父に生まれ、京都の同志社で哲学を専攻。のち東京に移り1991年に最初の評論集『シュミレーショニズム』を刊行、批評活動を始める。著書『日本・現代・美術』『「爆心地」の芸術』『反アート入門』『後美術論』『震美術論』ほか多数。最新刊に『感性は感動しない――美術の見方、批評の作法』。福島県の帰還困難区域で開催中の「見に行くことができない展覧会」、"Don't Follow the Wind" では実行委員も務める。